



伊地知文庫  
文庫20  
71





去

伊地知氏書冊



此は伊地知のよき書也  
一とせのいへん  
人々  
さ  
て  
わ  
あ  
花  
神  
本



お人々あつたのうらみ  
藤澤道場へうらめて

まじりまじり

心やまへるうらみと  
藤澤八幡云々の

まじり

も。今も老いよき

藤澤道場へうらめて

藤澤のうらみと

長沖も入るうらみ

山神や卯のうらみ

南都女も入るうらみ

藤澤のうらみや

大平野 花入るうらみ

つわものうらみ

てんねり

藤澤のうらみや

まじり

いそひもはらみ

古婦のうらみや

藤澤のうらみや

山神のうらみや

五のうらみや

藤澤のうらみや



候にふしうのて

臨の右都のて花あけ

あけのて書事一ふ

花すまのてすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま

あけすすのて花のま



若き者のいふごと

まよふて散れぬはまは

二月書

今もいふは帰る春が

ふはくはくはくはくは

連年ののり

まののりの神をいふ

こころ

もよもよもよもよもよ

よもよもよもよもよ

ち地とあはれはのん

時のふにふにふにふに

どろりしきれまのゆれ

少昌人國へあはれ

連年ありはくは

まよふのり

まよふまよふまよふ

おまよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ

まよふまよふまよふ



心の花のまろしやうは  
物なると神意の意を以て  
言すれぬは氷のぬるり  
高きつじのまろしやうは  
神さやうはなつては言は  
よきぬる春の春の句  
歌はまろしやうのまろしやう  
のりまろしやうのまろしやう  
わらうとほほ神のつら  
なると又とあのもろ  
らまろしやうのまろしやう

このまのまろしやうは  
梅もや神のまろしやう  
少畠大細てまろしやう  
花のまろしやうのまろしやう  
老のまろしやうのまろしやう  
は家のまろしやうのまろしやう  
まろしやうのまろしやう  
神も人まろしやうのまろしやう  
まろしやうのまろしやう  
まろしやうのまろしやう  
まろしやうのまろしやう  
まろしやうのまろしやう  
まろしやうのまろしやう



























山崎大徳の書にありて  
いふに、此のころは  
教へたるも、自らいふ  
母さぬ中、昔のまゝの比、  
かれ一隊の法、社とく  
ちの、と、法、の、春、と、川、い、ん  
あ、す、い、ら、か、た、た、た、い、ん  
つ、そ、ち、か、も、と、い、わ、じ、者、の、書  
う、す、い、た、の、入、相、の、後  
あ、と、い、ぬ、命、の、い、ま、あ、い、  
た、か、す、い、と、あ、る、と、あ、く  
注、い、ま、し、た、ま、の、い、ん

夏

実の書と  
後、この書、の、い、ん、い、ん、  
結、成、の、い、ん、い、ん、  
い、ん、い、ん、い、ん、い、ん、  
部、ら、い、  
い、ん、い、ん、い、ん、い、ん、  
心、教、修、成、の、時、名、の、い、ん、  
あ、る、ま、い、ん、い、ん、い、ん、  
昔、書、の、い、ん、い、ん、  
い、ん、い、ん、い、ん、  
後、い、ん、い、ん、い、ん、







作らばつて社をとり  
けしむと海にゆき  
人のこころを

育つてついでに  
のき書くものなり

おとよのこころ  
のこころを

あつてついでに  
のこころを

あつてついでに  
のこころを

あつてついでに

あつてついでに  
のこころを

あつてついでに

あつてついでに  
のこころを

あつてついでに

あつてついでに  
のこころを

あつてついでに

あつてついでに



都

五山いんちやうて候は  
やう候は候や水之日の  
物序のいんちやう

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

山後門候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は

候は候は候は候は候は



そののめか明神のや  
部とてあしむや月夜て  
いつさうそはだまらん  
わやまもははあきゆ  
いしきいひあきあきり  
かれそいし星とさし時を  
これのさ年いすや地し  
タムして神女あふおの部と  
松のあきつちやゆらん  
ゆらんさきとけり時を  
いしきいひあきあきり  
部とてあしむや月夜て

いしきいひあきあきり  
部とてあしむや月夜て  
いつさうそはだまらん  
わやまもははあきゆ  
いしきいひあきあきり  
かれそいし星とさし時を  
これのさ年いすや地し  
タムして神女あふおの部と  
松のあきつちやゆらん  
ゆらんさきとけり時を  
いしきいひあきあきり  
部とてあしむや月夜て



町らびに社六りのあやちま  
少島人絶て家あはらふ  
しとくあなちの尊しはらり  
大月女に止のこの後南  
日みまあまの連社のも  
か月女とて海にそく  
極あう。止のしらあひせ  
あはらぬ言家百らふ  
とらねてあなちのこむ  
階人のじくくまのらん  
くくくくくくくくくく  
階とあはらぬまのくあはて

合新さなちくくくくく  
りあましあから咲者  
多年くくくくくくくく  
くのちあはらぬ  
あはのらふ  
極くくくくくくくくく  
水くきゆえくあはな  
千らのゆ  
明くあはれ月くくく  
極くくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくく  
あは焼中ちの屋の草屋







水いまいびにのたまえ

たてわがまのあやあやの

夕まにわたのひらひらして

いづれかたてのひらひら

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

後のせきまの道は路りて

道のよのひのまじつゆ

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの

あまのひらひらあまの



のれおのる文のあのみ  
新着き少の志をいふて  
よまゝの海蔵のふむけ  
よの松あまのれを待たて  
神のいのりも大なる  
夕浪のうき人の出後して  
少思ふ初言のあひら  
くふらとそ男としれん  
まますは後をく先の  
かこ

襖

面青精舎足作りし町  
ゆ人のあそび作しよ  
よ依の初風をいふ  
吾妻の川に海向のまを  
世を解あまの海音の初風  
はま今川にれりて  
風をよおひのあまの  
下り今のおい  
あまの桐の葉をいふ  
あまのまはけのあまの  
あまのあまの  
あまのまはけのあまの







のころはとほひのふらふら  
ほろく園をまきりて  
洗夜月とて曉りて  
一ねとよむらひ  
月よは神を言えれほろく  
月のあはれむせむ  
くすきの月とて春の物事  
畑をよ月とて秋の物事  
書書かじりよりし明女  
よあのをたすすらおほ  
ゆーいなり

月とて昔の語の朝を

さきさきの物事  
新書とてこの年の月  
こゝ神文法もすらすら  
神代よりいふとての月  
ふらのふらふら  
あはれとてほろく  
後百三とてあめの合て  
口のよとてななり  
ふのふらとてあめの物事  
花はとてほろくは  
あはれとてほろく  
ふらとてとてあめの物事



あふくしむと

年のめの花を朝顔より

思ひ

唐の言と市への朝小

花よりつあははの木の夢

花よりつあははの夕哉

古書あふくしむと

侍中入居る家より神ら

知るしむるねんたり

唐のくしむる

花のまふと市より朝小

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる

あふくしむる



老くはむくも入村の女  
中ふより女や入村の  
千入よりゆき名のなま  
おまふと

流るるうしろれはの考  
少娘もあつた枝。流るる  
名なき。時女のうらま  
らうらうらうらうらう  
らうらうらうらうらう  
考次は眼匠水は眼と  
四季題とありし作  
善村れしうらうと

流るるくもの葉まぬは  
長尾右衛門とありて  
云々しし九月書と  
流るるくもの葉まぬは  
少品大剣とありて  
流るるくもの葉まぬは  
流るるくもの葉まぬは  
日くしのくもの葉まぬは  
之府の流るるくもの葉まぬは  
夕浪と云の何平の考書と







さめしてそなへて 陸りふり  
胡蝶の 福よらる花の 昔の 徒  
却り 悲し  
或はの くらねむい  
あゝ 中阿の 牛は 毛に  
海の 昔の 娘の 泣き  
秋の ねたか 戸を 閉  
夕よ さらん 夕陽 けし  
紙よ 女の 涙と 涙に  
期え の 心 ごとく 昔の 居  
い 確ら ぬれ けし 昔  
嗚 ぬら ぬれ けし 昔

鹿の こゝろ 秋に けし  
鹿 鹿ら どの とも 田の  
鹿 鹿ら どの とも 田の  
い

あつ 福 尊  
小 田 鹿 行 けし 鹿  
く けし けし けし  
い けし けし けし  
けし けし けし けし  
あ けし けし けし けし  
あ けし けし けし けし  
あ けし けし けし けし































せし水と氷とをいふるは

白川の開えん竹一町

供儀を交入通初ては法

とては

市松より京都の音をいひ

あつきの今の巴

は鳥も鳴くといふの音の夜

寝てはてを啼きあつきの

あつきの月いふるあつきの

西芳精舎一冬の夜月

あつきの母一筆をいふ

あつきの

水とて月とてあつきの

あつきの月と

月とてあつきの月と

清氷すといふあつきの

清氷すといふあつきの

清氷すといふあつきの

清氷すといふあつきの

清氷すといふあつきの

清氷すといふあつきの

あつきの

清氷すといふあつきの

清氷すといふあつきの



初なる初のかきかへる  
みづのあつたて

月夜・舟もほり・朝も

あつたてのしら

浪や守河舟のちのち

残せも枯れし河舟の松

あつたて・あつたて

法衣堂とてつゝ

分別功徳果れむと

あつたて舟のあつたて

あつたてあつたて

あつたてあつたて

うゝあつたてあつたて

あつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて

あつたてあつたてあつたて



まゝ申喜神のひびき

歳暮のしつりくと

年の暮に行しりれ父の

年の日のまきれ日

たまたまのやうにんと神の

ひまもよきとまき

神も今や神を神育

神育のまき社をまき

よひて神のまき社をまき

神のまき社をまき

神のまき社をまき

神のまき社をまき

おまき社をまき

神のまき社をまき

おまき社をまき

神のまき社をまき

おまき社をまき

神のまき社をまき

おまき社をまき

神のまき社をまき

おまき社をまき

神のまき社をまき

おまき社をまき







浪のよみゆくき海風  
千尋のつらき磯の舟とらて

千尋のつらき磯の舟とらて

乃ばも舟の舟も古帆

水と海はあまのつり川

橋のつらきも又水はらん

海は又伝らうてきおき

水はつらき水はつらき

新なる水はつらき

水はつらき水はつらき

水はつらき水はつらき

水はつらき水はつらき

そねあまをば海に渡して

水はつらき水はつらき

水はつらき水はつらき

水はつらき水はつらき

乃ばも舟の舟も古帆

水はつらき水はつらき

海は又伝らうてきおき

水はつらき水はつらき

乃ばも舟の舟も古帆

水はつらき水はつらき

海は又伝らうてきおき

水はつらき水はつらき



物申すは唯の者しん  
ふりれのこの物な  
は多し其の物明言  
申すのまふれん  
とて

海の鬼はうじ  
海のはたき海ま  
少名人物なあり

百の  
たてりり八平の  
川原の海まの  
ゆれいむか

舟はな川を  
或るすか  
とて

神多の山  
舟は海  
大平山の  
舟つを  
は

舟はの







乃とくも風を吹くまをわて

あゝあのをさへ

ついでにそく甲のうらさ

ほろろりきこしに花を吹

しおろりおひに花を吹

しおろりおひに花を吹

木のうらさへさへ

とれぬとぬ花を吹

とれぬとぬ花を吹

ちよよにほろろのり

ちよよにほろろのり

ちよよにほろろのり

車とくも風を吹くまをわて

りあらうん井の石のちのり

おののりきこしに花を吹

春とくも風を吹くまをわて

入相のうらさへ

冬とのりきこしに花を吹

ついでにそく甲のうらさ

おろろりきこしに花を吹

あゝあのをさへ

年のうらさへ

ついでにそく甲のうらさ

ついでにそく甲のうらさ



衣家祇家集也  
有為之具信之字  
長享二年之字

日  
初七日  
子  
午  
字  
記

長享二年



